

ガ ー ナ 大 学

(University of Ghana)

アクラ北方およそ10マイルの所にレゴンという丘がある。この通称レゴン・ヒルといわれる小さな丘の上にガーナ大学がある。小さい、しかし大学を建てるために造られたのではないかと思うほどすばらしい丘である。それは、この丘の上から、アクラ市街が一望のもとに見ることができるからではない。この丘を中心として、およそ3マイル四方に展開する実に広大なそのキャンパス、学問の場としての環境がすばらしいのである。

都市バス、タクシーそして私営バス兼トラックの機能をもつローリー以外には自家用車にしか頼ることができないというアクラの市街地における交通状況が、もともと不完全であった都市計画のためにアクラをいっそう混乱と騒音の町にしている。だから、アクラからレゴンにやってくると、ごみごみしたアクラの町とのあまりにも対照的であるために、レゴン・ヒルに散在する大学の整然とした環境がより強烈な印象を与えるのであろう。

ところで、低開発国には早急に解消さるべき多種多様の問題があるのは改めて言うまでもないが、人材養成を中心とするいわゆる教育問題も、きわめて重要な課題である。ガーナも、一握りの高級官僚以外には無気力な中堅層しか存在せず、意欲的な中堅層の育成こそ急務であるといわれている。したがって、このたび発表された経済開発7カ年計画案においても Secondary School の生徒を含むいわゆる高等教育の生徒、学生の増加、育成に大きな重要性をおいていることが見られる。このような、いわばガーナ政府の人材養成の中核たるガーナ大学が、形式的にもせよエンクルマ大統領を総長において、その任務を着実に遂行しつつあることは十分理解されることである。しかし、いわゆる教育効果ないし教育投資は、その成果が顕在化せずきわめて地道な努力を要するものであり、したがって教育投資は本来的には第2義的に扱われやすい性質のものである。にもかかわらず、スクルマ大統領は、1961年10月1日にそれまでガーナ単科大学 (University College of Ghana) と呼ばれていたのが、ガーナ総合大学となるにおよび、同年11月5日に議会の承認を得てみずから初代総長に就任したのである。スクルマ大統領は、かれが8年間のカソリック系ミッション

スクールでの教育ののち1年間をみずから教壇に立ったという体験、さらに国立師範学校を終えて1935年にアメリカ留学するまでのおよそ5カ年、やはり教鞭をとったということなどにより、教育問題に対する態度はきわめて積極的であることがうなづかれるわけである。

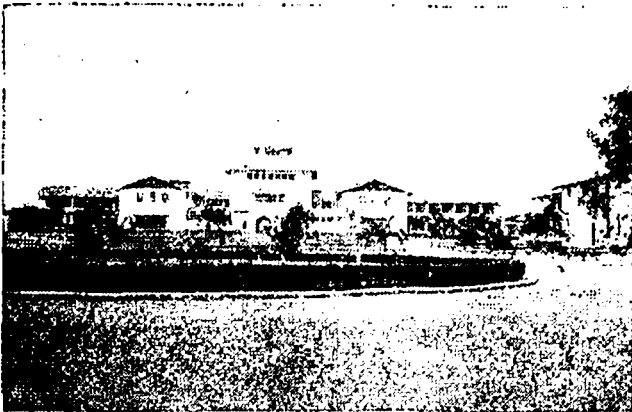
ここで、前述したガーナ単科大学の生い立ちを少しく振り返ってみたい。このガーナ単科大学は、1945年に発表された高等教育に関する二つの委員会、Asquith および Elliot Commission の調査報告にもとづいて、ゴールド・コースト立法審議会 (Gold Coast Legislative Council) の承認のもとに1948年に設立されたのである。この単科大学は同年10月から開講し25人の教職員と90人の学生をよっていたのであるが、かれら学生たちは1930年にさかのぼるいわばこの国の大学教育 (あるいは専門教育) の先駆たるアチモタ専門学校 (Achimota College) の卒業生であったのである。ちなみにスクルマ大統領が1926年から同30年までに学んだ国立師範学校が前記アチモタ専門学校の前身なのである

組織および財政

ガーナ大学はいうまでもなく一個の自治体であって、政府などの従属組織ではない。そして国立高等教育審議会 (The National Council for Higher Education) と緊密な連絡をもっているのであるが、この国立高等教育審議会はガーナ政府と各種高等教育機関との関係を調整、維持するためのいわば連絡機関なのである。

このガーナ大学はまだ大学独自の法令を制定してないが、教授、各学科主任および各学科の教員代表より構成されている Academic Board があり、これが大学評議会 (The University Council) の決定のもとに大学内部の管理を行なっているのである。さらに、この Academic Board はいわゆる常設執行委員会 (a Standing Executive Committee) をもっており、そのもとには各学部委員会 (Faculty Boards)、財政委員会 (Finance Committee)、住宅委員会 (Residence Committee) およびサービス委員会 (Services Committee) がおかれている。

大学の副総長は、先年まで国連のコンゴ駐在代表であ



ったオブライエン氏 (Mr. Conor Cruise O'Brien) であり、かれは事実上大学における教育指導および管理運営の最高責任者である。また大学の書記官 (The Registrar) は大学評議会 (The University Council) および各種委員会の議長であって、数名の副書記官たちにより補佐されているわけである。

ところで、ガーナ大学の予算総額は明らかではないが、年間予算の95%は政府より給付される補助金であり、人件費を除いた年間予算額はおよそ1100万ポンド (邦貨約110億円) であるといわれている。

つぎに学部の構成を列挙すれば、つぎのとおりである。

(1) 人文・社会学部 (The Faculty of Arts and Social Studies)

英文学、宗教学、古典文学、哲学、仏文学、音声学、数学、歴史学、経済学、地理学、社会学、考古学、法学、教育学、以上14学科のほか、アフリカ問題研究所 (The Institute of African Studies) および公民教育研究所 (The Institute of Public Education) がある。

(2) 自然科学部 (The Faculty of Science)

数学、地質学、物理学、動物学、植物学、化学、地理学、作物管理学、動物管理学、以上の9学科である。

(3) 農学部 (The Faculty of Agriculture)

作物管理学、動物管理学、農業経済学、農業経営学、植物学、動物学、化学、以上7学科よりなっている。

人文・社会学部、自然科学部、農学部の3学部を通して、すでに725人の卒業生を送りだしており、また現在は684名の在学学生を擁している。これら684名の在学学生のうち86人がいわゆる外国人留学生であり、この中にはナイジェリア、カメルーンなどのアフリカ人学生にまじって、アメリカ、西ドイツなどから来た留学生も5~6名在学

している。

ところで、在学学生1人当たりの授業料は、寮費などを含めて200ポンド (邦貨約20万円) である。しかし、ガーナ大学は現在4カ所に学生寮をもち、全学生をそれに収容するいわゆる全寮制を行なっており、他而在学学生中のおよそ90%の学生は年額240ポンド (邦貨約24万円) のガーナ政府奨学金を支給されている。さらに、残余の学生たちはそのほとんどの者が政府奨学金と同額の私的な経済援助を受けており、在学学生はすべて食と住を保証された、いわば完全な給費生であるといえる。

加えて、最近文部省より発表されたところによれば、在学学生1人当たり年額50ポンド前後の「こづかい」を支給する計画があり、学生生活の基礎的条件は十分保証されるものと思われる。しかし、めぐまれた生活を送っていると思われるガーナ大学の学生たちも、昨年秋には食事の内容をめぐる大学当局と衝突し、数回にわたるボイコットを行なった経験をもっている。雑誌ライフにも大きく報道された日本の全学連は、当地の学生にも勇名を轟かせているが、ガーナ大学の学生運動は経済的ないわば生活に直結する問題に重点がおかれ、政治闘争的傾向はほとんど見られないのが実状である。

ところで、改めていうまでもなく、ガーナ大学の学生たちにとってはサッカーとテニス以外はスポーツないし娯楽らしきものは見られない。映画 (時には演劇も) が唯一の一般的娯楽であるこの国では、マージャン、パチンコ、ボーリング、スケートなど枚挙にいとまのないレジャーに無縁なのも当然であろう。しかし、クリスマス、復活祭、創立記念日などを中心とする前後数日間、四つの学生寮のうちのどれかが主催するダンスパーティが行なわれ、夕食を終えた午後9時ごろから翌朝の3~4時ごろまで踊りあかすのである。このパーティの中心は、非常に簡単でしかもガーナの伝統的リズムである「ハイライフ」というダンスなのである。「ハイライフ」の詳論は別の機会にゆずるとして、とにかく学生たちは若い研究員や講師などと一緒になって、その強烈なエネルギーを発散させ、大いに青春を楽しんでいるようである。

経済学科の現況と研究活動

在籍学生数225、教授陣総数16という数字は、経済学科 (Department of Economics) がガーナ大学においてもっとも充実していることを示している。

わが国の大学のように、「教授」の数が非常に多いのは他にその例を見ないといわれるが、ガーナ大学におい

ても「教授」(Professor)は各学科に1人という原則を貫いている。

そして、この経済学科においても、ポーランド国籍のドレノウスキ教授(Professor Jan Drewnowski)が学科主任を兼任している。同教授は *Journal of Political Economy* などにも論文を発表した経験をもつ国際経済学者であるが、ガーナ大学経済学科主任教授として、きわめて多忙な生活を送っているため、その研究活動は大きな制約を受けているように見受けられる。

当経済学科にはガーナの政界、学界の主要な経済学者からなるガーナ経済学会(The Economic Society of Ghana)の本部がおかれており、ドレノウスキ教授は学会の機関誌 *The Economic Bulletin* の編集長も兼ねている。さらに同教授は、毎月数回にわたって開催される経済学科研究会の Staff Seminar でも議長を勤めねばならないのである。

ところで、ガーナ大学経済学科の研究活動を紹介する場合、その研究会、Staff Seminar を挙げねばならない。この研究会は学年休暇を除いて毎月2〜3回開催され、1人の「研究発表者」が30分ないし1時間にわたって自分の研究成果を発表し、そのあとは自由討議にはいるという形式で進められる。この「研究発表者」は、原則的にはもちろん経済学科のメンバーであるが、前記ガーナ経済学会の会員からも選ばれることがある。すなわち、ガーナ大学アフリカ問題研究所の研究者も、招かれてその研究成果を発表することもある。以下が昨年11月から

今年4月までに開催された Staff Seminar における発表者名とその研究テーマである(別添リスト参照)。

最後に、筆者も来たる6月の Staff Seminar には「日本経済の高度成長」について発表する予定であることを付記しておく。

Staff Seminars
(November~May)

9/11/62	Mr. George Nez, Economic Basis of Forecasting the Pattern for Physical Development in Ghana.
1/12/62	Mr. R. Szereszewski, Inter-Sectoral Structure of the Economy of Ghana.
18/12/62	Dr. J. Mars, Dynamic Input-Output Sequence of Industrialisation Investment.
8/2/63	Prof. J. Drewnowski, Some Remarks on the Theory of Mixed Economies.
22/2/63	Mr. T. L. Hodgkin, French-Speaking African States and their Interrelationship.
8/3/63	Mr. A. J. Killick, Factors Affecting Labour Productivity in Africa.
26/3/63	Prof. P. Vuscovic & Dr. O. Sunkel, Problems of Common Market in Latin America.
10/4/63	Mrs. Ann. Scidman, The Role of Foreign Capital in the Latin America.
18/4/63	Mr. P. P. Van der Wel, Economic Integration in West Africa.

(アジア経済研究所海外派遣員 細見真也)

—在アクラ—

日本貿易構造の長期的予測

— アジア経済研究シリーズ 第46集 —

福地 崇 生 著

第1編 総論	
第1章 研究の目的	
第2章 研究の手続き	
第3章 資料の整理	
第2編 モデルの説明	
第1章 マクロモデル	
——マクロモデルの総括・各論——	
第2章 ミクロモデル	
——ミクロモデルの総括・各論——	
第3章 設備投資モデル	
——設備投資モデルの方法——	
第4章 輸出モデル	
——総括・輸出モデル推定結果——	
第5章 輸入モデル	
第6章 産業連関モデル	
——総括・30回34年産業連関表作成過程・36年より40年までの四半期ベースI-O表予測過程——	
第3編 貿易構造変化の分析	
第1章 2つの総合予測結果	
第2章 貿易構造の分析	